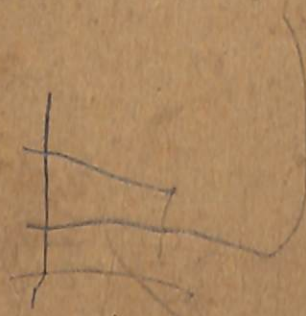


俳諧十家題題集  
報



1799-2

俳諧資料カード

年代	寛政11
編者 (筆者)	八千草
書名	俳諧十家題題集
備考	奥書

(下垣内蔵)

吳市阿賀北五丁目三番八号  
 下垣内和人  
 電話六三三十一  
 行737

俳諧十家類題集雜之部

○目錄

神祇 親教 法樂 狂文三 夜夜 戀 八  
 餞別 別 別 齋別 送別 十 紀行 旅泊 罷旅 十三 名所  
地名 旧跡 十八 取思 共 廿 懷旧 懷古 共 廿六 述懷 共 十八 贈答  
後招 共 廿 画讚 甲 廿 詩文 詞 和考 甲 五 雜題 甲 八  
 祈禱 甲 六 每常 甲 九 追善 悼 甲 十 廻文 甲 五 題其發句



下野内入

俳諧十家類題集雜之部  
...

維新一

俳諧十家類題集雜之部

神祇

八千坊 輯校

外垣也 おりひもかきん 涅槃像 芭蕉  
清子とら子の一をせり 梅のふ  
とらとらに 寄柳合ぬ 遷宮  
聖の 宴の 名を 名を 名を  
宮人よ 我名を せり せり  
約たるも 名を 名を 名を  
結徳

八十年の  
空府

梅より月入時お風おたふると自然

言水

空府より  
空府より

空府より  
空府より

其角

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より

空府より

空府より

空府より

内容  
空府より

三選奉納

春日法集

空府奉納

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

空府より  
空府より

元禄十四年二月廿五日 聖廟八百餘御年忌  
於龜戸御社詩歌連俳令真行一巻

空府より  
空府より

空永開元奉幣使御代参の人の表を

空府より  
空府より

雑

十八の町井はゆふとてきりくる  
井をせしかつおもてきり山の奥

信濃催馬樂

君もいれはるる人修徳のまゝはあま

うゑを待視

稲まゝのきりかぬ井も同井もま

らまゝに傳つて東本のもち居の井

これとてそひまの松まのちりまの

井田まの敷ううき松まのちりまの

まゝとてうま大くちら成すうまの

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

其角

嵐雪

希因

嵐雪

荏栢天神  
奉納

龍二

山之太ふ

北野法系

住吉奉納

神明奉納

住吉奉納

住吉奉納

住吉奉納

住吉奉納

住吉奉納

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

うまのまゝあうまのけるまのまゝ

其角

希因

来山

麦林



所合羽の修一や修女と云ふに 其角

大慈心院のよき成るやうと

確取の園よりあてこらへし

空をへたこまぬく懐の使舟

舟よき道修よきまぬく月ひま

三列小酒井村観音奉納

如き輪や解もかへしむら

廣詞止觀より目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目以てつるを

ちやうよきこゝ獨りりし

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して  
會啟をまめしうふたはくは有瘡

得正觀音  
像

色極極始維脱後悟菩のみの  
くろく成

為瘡のいゆるめけり 隨法也 其角

如是果のくはを

こゝろこゝろひろくし栗のら

投記品無有魔事

くろくしうぬくく彼君の夕日

南京茶沙寺の修言よき

涼風や眠滞くまの茶沙也 言水

和歌式部のはる春をみたり一里  
彼式部の月れさうと修言よき

納のさへくはなうまつり 嵐雪

南無大悲觀世音菩薩

蓮

素衣のやうなとりの老女姫をよむ

嵐雪

芭蕉の墓よりのはらふて 芭蕉の墓よりのはらふて

位持をして拂ひ果るるまのま

草拵を上人の岩室

蒸のうらりたけりちりりる

襖栗やまにさけさるるほのゆ

自らの徳も人のさへあはれ

底志の人のさへあはれ

煮るるまのまのまのまのま

能  
神

後  
五

法花をさつて

はらふるも秋もつるぬ大徳が 嵐雪

歸依法肉迷の業を捨る

飯のやうな飯をまをるる飯が

我等今日聞佛音教觀喜踊躍

と讀誦しなきて

咳くつくと念佛のの柄抄る

一切衆生悉有佛性

空人の所かく雪のやうなりか 来山

まきまきの一里眉毛は秋の霞なり 蕪村

妙義山

山崎 女人堂

百合もその娘らへあまの志ほりくは

麦林

木食堂

たふは衣を粟を密耕もふの時

阮 柳

我月も柳と見えて涼しはよ

賀 祝

此宅かえ

よこたあや産すはらう背戸の燈

芭蕉

このめい

鵲啼や赤子の頬を吸時ふ

其角

貞佐宅

けしやを泣く所もさうはひて枝の露

梅屋氏の祖父古坂表の字切はすて

其角

御感状 御太刀成り哉せしむる正月

十七日の朝とて中佐牛上校増後

の御度十七人さへも正月十七日

そまにりり

端持を文彦協や梅の末 其角

志の島のふりともさぬ梅の末

降そくし梅の秋乃嵐より 素堂

法林のそまふはらう

心まの帯をぬたりや梅の末 来山

ハ十八の末

梅の末を月もいりさうの末

蕪村

刺箋

祝賀書

なんやや 鶴もまてとあねの乳 芭蕉

幼年の梳のこりしし けいあが

先親へ栞紙のこりし けいあが

たうらふの皮は梅の結けり 其角

かまを結ひてす けいあが

かま戻りしはけいあがの結けり

衆龍入懐のまてひて

引はまておまをさるる龍の乳

午の年午の月午の日午の付

うらな合

競る時又入競身のいこころ那

遊成加々訖

あまをそて外ふふせの坂高し 来山

えりま珠喰あそし人の白はたを

おまを梅のつふまや貝の玉 其角

梅後の夜 せりころつのあまはつる冷利か 嵐雪

氷をくねはけはつるあま

ははのまはらつくの産まうれ

ト后と後 約志の入堀はらもるる後居る 蕪村

戀

うきを慕ふ

酒よりうきを慕ふは恋の流るる

芭蕉

恋を慕ふ

うつらと慕ふは恋の流るる

治徳

恋を慕ふ

雲を慕ふは恋の流るる

恋を慕ふ

身を慕ふは恋の流るる

言水

待を慕ふ

我を慕ふは恋の流るる

待を慕ふ

来ぬ人を慕ふは恋の流るる

契不違意

関の灯を慕ふは恋の流るる

其角

待を慕ふは恋の流るる

雜八

井筒や

あけしをんや 待を慕ふは恋の流るる

待を慕ふ

柳を慕ふは恋の流るる

来山

待を慕ふ

まらりてを慕ふは恋の流るる

恋を慕ふ

似傳の小を慕ふは恋の流るる

其角

を慕ふは恋の流るる

二挺の

まらのおの女を慕ふは恋の流るる

二挺の

けを慕ふは恋の流るる

二挺の

松を慕ふは恋の流るる

二挺の

我を慕ふは恋の流るる

嵐雪

依ん糧本所非おふりて世をさ  
しりしきよまのりよの古風さうし

川流くもまのあまのあまの月

嵐雲

多粉付て流るるをりしそ汗拭

麦林

澄下流のやま月あやし時

希因

傾津よりしきむひ中へ

希因

けいせいのうらなふたつとよ川

来山

解の後産くふおの入る病

希因

乙多のしつと折る揚屋入

希因

高系

傾増傳

希因

餞別

送別 餞別 送別

指さる葉よりこのまのさうけ 芭蕉

むく起る懐のまのまをいふ 素堂

お高のねはまのうらまをいふ 素堂

夕干にけりさるる河を越へ人 沾徳

お高平くまのまをいふれぬまの旅 沾徳

梁の煙をさるるの上 其角

若刈のうらなふたつとよ川 其角

うらなふたつとよ川 其角

芭蕉 送別  
素堂 送別  
沾徳 送別  
其角 送別  
七月 送別  
其角 送別

七ノ考

又考々を托のころをうしをばに

志川の言ふよんふらむとていふれり

其角

比心持さよふふるふ心一具

芭蕉

とまむけのついで原をきれて

そのおもひのうらたにん

おもひのついで原をきれて

其角

序金知えをよまふ

深きと水のそらや速と金

葉巻考

友成も葉の供り播らまて

活活と葉の運りて別別の句

新十

なまを眼むらうしをばに

おろすやあつむもは序

中村少也の速くそよまを

山崎も人をさうしやん

後府仙石玉葉の速く別

最とて心拿とて心昔新

芭蕉家をとて心

ふらむけのついで原をきれて

極月十日西のついで原を

ついで原をきれて

湖舟独海

舟久松浦山

旅

乾成修

竹溪修  
舟後

舟久の船のそらうらうらうれ

其角

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

嵐雪

舟久の船のそらうらうらうれ

来山

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

蕉村

聚十一

夏別

秋別

舟久の船のそらうらうらうれ

芭蕉

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

嵐雪

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

舟久の船のそらうらうらうれ

言水

舟久の船のそらうらうらうれ

蕉村

舟久の船のそらうらうらうれ

素堂

舟久の船のそらうらうらうれ

修羅やんて又毒もけり秋の露 治徳

丹羽たふさのうらぶらり  
系部を

馬牡丹のやちかその大なる 其角

春風をよめる

修羅をいふとこれなり 燕村

友の事もはらふとくちのふ 未山

らるゆふやゆふの修羅をいふ

井風やせむはらふの修羅も

又まは修羅  
修羅下向  
仕度

紀行

旅泊 巽旅

旅宿

九月の月の下り 芭蕉

秋をいふは秋の月

小舟をいふは秋の月

さあやうの月

八月の月

八月の月

八月の月

秋風

うき人の娘ふもすゝもあはれ  
 草花へ入舟ありきまゝかきまへ  
 山嶺をうきくさのすゝもあはれ  
 月夜にけりしのすゝもあはれ  
 橋よりおきまゝかきまへ  
 ほろろあはれすゝもあはれ  
 まゝあはれすゝもあはれ  
 船中こゝろあはれすゝもあはれ  
 山嶺をうきくさのすゝもあはれ  
 うきくさのすゝもあはれ

春の空の青

まゝあはれすゝもあはれ

素堂

あはれ

岸涼に沖の小舟のすゝもあはれ

大いふ

船もあはれすゝもあはれ

春の空

是はまゝあはれすゝもあはれ

大いふ

うきくさのすゝもあはれ

海念の人の

月をうきくさのすゝもあはれ

よひ

まゝあはれすゝもあはれ

あはれすゝもあはれ

海念の

うきくさのすゝもあはれ

山の峰	友の目や	さかんで	嵐の	嵐雲
山中温泉	かいたて	る幕	雨よ入る	希因
伴登山	さのつ	けし	まは	
大和橋	短あや	人あや	余あ	大和橋
鷲崎石	このふ	れら	ら	峰
西川谷	尾ま	の	ま	峰
伴登山	ま	解の	系	同さ
八坂	あ	ま	ま	ま
朝熊	吹	て	れ	ま
鼓う岳	ほ	ま	ま	ま

子持山	ま	ま	ま	ま
加茂温泉	こ	ま	ま	ま
三橋	こ	ま	ま	ま
三橋	こ	ま	ま	ま
風来寺	こ	ま	ま	ま
青光池	こ	ま	ま	ま
子持	こ	ま	ま	ま
権泊	こ	ま	ま	ま

ままのれや 幸於山のけりし  
 こま又まの孫もまより まま  
 こまの松のむりや夏の 寝  
 空まままこまま松の旭の那  
 百まままかて涼 池のま  
 娘人ままま衆人娘の解  
 橋ままの橋もまてままの心  
 けつま山やぬ 浦ままを流ま  
 目ままよままままの 其角  
 ままままままままま 嵐雪

芭蕉

和列子巻  
村々

花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の

和列子

和列子

かたはるや角よりふよほく  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の  
花の影もさしはらふ影の

和列子  
村々

希因

南無阿彌陀佛  
元南田川  
平田のふた

三月の上  
二月の上

高き川

形智山

三日月

其角

ふを流伴を伴舞下裏  
山廻り早なるりやうに依れ  
西川の流を流を流のり  
川まりのまふかろくや谷の  
難の後の山吹の流やま  
破るり高のるるや葉の  
思ふるりの市深よま  
一をののあかさをさるる山

嵐雪

船十六

雪のうらみ

片足もきふ  
花のまもつ

花のうらみ

花のうらみ

来山

燕村

花のうらみ

芭蕉

手紙

八月

廿四

夕

夕

夕

夕

下戸の夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

芭蕉

卷十七

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

夕よはむき池田の月夜

素堂

沾徳

嵐雪

其角

希四

其角

沾徳

芭蕉

桐葉

月ひあふささるる星の回らつり

希因

旅 店

富士の雪隠を海屋に流す

其角

罪 徒

山崎のあふささるる星

言水

二月十日

富士の嶽のふもと見て参る

其角

山崎

手動の尾あふささるる星

其角

本橋山

河流とつるをながるる星

来山

名所

地名

集點

松嶽

松嶽乃 志つる月の名所

芭蕉

雜十八

西の橋

夕晴の橋にささるる星

お祭

大いなるお祭にささるる星

小倉山

小倉山の門にささるる星

山崎の雪隠を海屋に流す

富士の嶽のふもと見て参る

手動の尾あふささるる星

河流とつるをながるる星



兼 根

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

松の上よふらふらえらる村の

月夜

村の

根の

田の

山

此

たつ

ふは

此の

其角

嵐雪

雅

兼 根

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

玉海

ふらふらの

月夜

村の

根の

田の

山

此

たつ

ふは

此の

希因

麦林

とよせの洲

あつた月よりうらたを桂川

蕪村

高 旌

西川のあまもあつたを

源之寺

笛の音もあつたを

山崎の池

音のつれあひもあつたを

権兵衛

あつたを

権余建寺  
宗寺の家

あつたを

鳴りて

あつたを

芳子生

あつたを

つれづれ

あつたを

所思

希因

来山

佑徳

希因

芭蕉

新  
廿一

深川を感

鶴をり波をすて傷氷を

芭蕉

徳澤庵中  
余の白

ふきかえりて

あつたを

あつたを

あつたを

あつたを

あつたを

あつたを

あつたを

二  
夕  
改  
唐  
目  
得

え後をち縁をたてんま六段の奴  
しめしむもさしめて中雪の松尾ふ  
そのひさしく斬る程を我世か  
るむり〜我を陰ふらん松尾が  
武士の大板言と叫り那  
まらまらこのは角とれとて〜  
は角や〜も石を怪をわすれ酒  
瓶破る〜奴の〜は〜の〜  
〜  
〜  
〜

芭蕉

新  
丹  
二

いせ又玄  
中巻より

芭蕉庵記

松尾  
孫某

大伴智月  
日記より  
流原老

月さひよの夜語りまあの世をん  
あふしてたふらふはふはふあふ  
をや〜と寝るをふす〜  
そゑゑ知ぬ松尾のガ〜  
母の〜の〜  
か将の〜  
松尾〜  
そよ〜  
そら〜  
紫の夕の月やそのす〜

和角彦言  
白

物寄自白

自陶自香

禪是塵界

らせ成るる  
るる

酒 流

か 郊 系

折之殺生  
偷盜り

人ものぬまや 後のら〜 芭蕉

朝顔よ〜 ぬら〜 非

ふは好〜 悟ら〜 左 産

秋十〜 せ却〜 けを〜 産

此秋〜 なるんて〜 幸〜 産

縮手〜 ぬ〜 ぬ人の〜 産

は〜 かり〜 ぬ〜 侍〜 産

音の〜 酒香〜 二 酒 其角

〜 中〜 分〜 産

〜 心〜 ぬ〜 戒の〜 産

終 廿二

鑑素堂  
秋池

風秋の〜 二 産を〜 産

秋も〜 産 産を〜 産

長〜 産を〜 産を〜 産

〜 産

桐の〜 産 産の 産 不 言

〜 産 産の 産 産 産

〜 産 産の 産 産 産

蕪村

秋 辛高  
堂

〜 産

白下

〜 産 産人〜 産の 産 産 産

〜 産 産の 産 産 産 産

其角

自得

初生

亡丹所  
なるらむ  
そふえり

るやうなりし 骸骨おとす 秋のま

懐を遣て 子猫を 養ふらん

下 初生を 養ふらん

五月より 我養む 母慈し

るやうなりし 骸骨おとす

養ふらん 養ふらん 養ふらん

養ふらん 養ふらん 養ふらん

かたし 未て 親系 海へ

不慮の表紙  
けりし

其角

嵐雪

其角

其角

壬生

暖屋  
まな

信東山

川骨のまじり ぬきぬき

楊梅の泣き 人なり

新屋の 花より

十文字の 遠く

徳園の 茶を

法 こと ぬきぬき

とや ぬきぬき

娘のまじり 行の 新

屏て 牡丹のまじり

嵐雪

麦林

来山

院へつづきつて一冊の書本を氣味よく

其角

四十よきつて死へつて名はあ  
りてはまはあつたあつて一冊の書

蕪村

文者として大獲其秋あつてつれ

初もつて群の中を遊んでつてつれ

つれつれつれつれつれつれ

月つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

龍世五

大正  
七年  
四月

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

其角

つれつれつれつれつれつれ

来」

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれ

龍世

こゝに

ふらふらと抱たあまうとやたふり 来山

# 懐舊

懐古

芭蕉居士の四松成海入

志をたのむ波のうらそふるうら 素堂

清之原と年経くも思ふを何成あふ竹 芭蕉

さゆりゆりのさかひもはらけりや

云々貞をさせよんるさやう干菜賣 其角

後醍醐天皇陵  
伊賀上野

能共

曲の年と初はるるふかひてまゐのほん

あつらひる柱の本をえん

おふらけしもとぬ嵐の本をみ

貞はる懐古のまゝ

常しやうとこもまの橋のむらうら

かゝひくも秋のうらまゐる楓 嵐雪

こくとまをれひとつらまゐるひ一族

をいひふりしぬらうらつらるる

ねのほらまゐるまのつらたれもれ

さゆりゆり

吉田村

懐古

けしきしつしつに中よきもけしき  
 むらんやま甲の下れまけしき  
 余をけしきも楠丸て太ふれ  
 文州や兵士ともうまのけしき  
 七年のまけしきけしき  
 古人移舟をありし  
 去来去移舟移りぬけしき  
 忠則古墳一樹のけしき  
 月けしきけしきけしき

嵐雪

芭蕉

素堂

芭蕉

来山

蕪村

浄土とせ代庵とて

新 廿七

宗祇の殿

述懐

老楽

けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき  
 けしきけしきけしき

嵐雪

来山

贈答

挨拶

涼しと秋の風をうけて御事なご 芭蕉

いさよひきしむらうと秋の風をうけて

隠居の葉を月とての回こらふ

本國  
如水別冊

こりりあて木の葉をうけて御事なご

雨申居の葉をうけて御事なご

きき若やふきとせぬ一株二株

大坂よそ人のまことの吟

杜の草かきくも秋の風をうけて

新 次

新波人福の秋をうけて七人う白

をよる舟よとる葉をうけて御事なご

指つりさしむれり

年秋よ指のほぬく山櫻の丸 其角

雲釋よやうつしむらうと秋の風をうけて 芭蕉

園庭の葉をうけて御事なご

日まはは代々葉をうけて御事なご

篠の葉をうけて御事なご

中つりしむらうと秋の風をうけて

雲の葉をうけて御事なご

正徳初會

憶為之答中

月代や藤より成る雪の霜

芭蕉

猿折て葉成はるる人夢枕

嵐雪

やまのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

さうのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

来山

松石のえ

嘯を吹くよきつらうを海

ふたし株をのこえんとてあまふ

いさゝかふさふさいさゝかふさふさ

あゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ

あゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ

あゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ

雜 共

おろしなま本巻もつらうをなす 其角

あゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ 芭蕉

暖簾のうらをのりつらうのあゝいさゝか

梅子も咲かぬ人保美の里へ

情もあつて能くあつてあつてあつてあつて

やあゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ

あゝいさゝかふさふさいさゝかふさふさ

孫捨つる物のまれあまふ 言水

南無研らひ五を侍へ

あゝいさゝか

燈の炭の煙もさうや おまけお 言水

東渡門主一城上人信宗にてらぬ

以ぬ目の風鈴を燈のやうにや

と平余年一首新井の宗人信宗の御書

壬午秋の閑るの序

松原のよき木よりや 松 梅

芭蕉の折まむと久しむらじりし

いつつふかに小車と入ん蒸の羽織 素堂

とびつとくともこれよ友の炭俵 其角

あつひつとくの後花をみよき

燈の煙に

新世世五

會 盟

と葉のうらなり 十中 角 被

まののさえて又よく 友 料理

器の中より 法を さらのくく

左 徳外よとくせし 是例にて行

か のをゆきに 外抱せし 下巻

年まの 合巻 けしや 凡 易

らるる 老のをゆきて

中 のとくよ 梅ぬき 奉人 けし 石

作るて 西書 けし 多 叙 徳 けし 時

はるん ねの けし けし

護の歩く二万石の帳の記さる

其角

冠里公備中ね山お入の時

川とら若やし酒の昔屋の袖を流り

汗濃とよ衣の骨格の内を流り

或人のまけを成りて

こぼるるりや昔のいふまゝに替りぬ

行を流るるらうしつ流落るるのいふまゝに

のいふまゝにまゝににありて

眼息よあのまおまをいふまゝに山流り

園のお乃さうまゝにこぼるるの袖

山田流るる

号新様持

箱 廿六

芭蕉をことりて

きりや十日さても回しむ先

あまいさるる流河の梅平さるとして

梅いり川 閑伽のおあまよむまゝ

一月廿二日冠里公のいふまゝ

葉割との上をを握る 藤を

雪のこぼるるなりまゝにこぼるる

めねおむつまゝにこぼるる

あまのこぼるる

おのこぼるる

山田流るる

秋天和尚の詩

夕顔よけりて色成りてさよふ雲を空

坊主小僧居んして人々小僧を酒を

中し者れを

坊主小僧集小僧謝酒を飲む事

並に酒を居るとして

裏老うの庵もいらん居の重

孝法うの雲のすうと中昔ね

秋葉録定の時

合羽さう麻よとこりあや秋葉道

經世七

中の形とて

感徹和尚の詩

せうと中野鶴衣よ玉をさう

九月九らりてと懐ひる人よ

さうやふも星ふ輝れあふれ

二新茶中人の舞

さうの時こよふ居てはぬさう

芭蕉声の歌

善法を鑑教又傳るとる事

春よとひあつて

まる人の形とて

其角

希因

其角  
切惣亭にて

ちり産

はまをよき法今とて秋は汗  
新之橋むとひふらや井帯  
うらや新うらやとて

山崎のちりくをまやあ月とて 嵐雪

まきく  
まきく

雪のちりや けこのまきく  
一 新雪を教とて

けりくや けりく

味崎とてよとて 秋の磯・那

人の世よ  
よすまら

まきくふらやとて 海をけりく

今とてよとて けりく 来山

老母のうらや けりく

秋風や けりく

けりく

糖解てまきく せのまきく 人 燕村

うらや けりく

幻作とて けりく

暖茶せとて けりく

丸雪のけりく

或後生の  
りくそ

さきせし  
人のせい

故人晚きゆい 東山西村と云り  
こころ時をわづらふ

身なきまじ 梁の月け 嵐の那

古危よ 茶釜まきく 揺らぐ

東山の林下に住む

ト志する一書はゆふや

嵐をもしぬや 引合ふ 後 東野

せんでとて人のまにあり

控まき 編み

よぢりし 志する一書はゆふや

燕村

来山

終世

画讚

は 鹽湯  
の 後

雪の白みのうら

くしゆきや ちりて ぶらり 雲とよめ

糠 早や 突りて 飯のまき 新

年々馬車は 骸骨の 蓄かき

芭蕉

輪まきや 旅のふつと 旅の 輪

まのや ち袋の 肉け 月と 雲

まぬふかや ちりて ぶらり 雲とよめ

終 後

楠正成像鉄肝石心以人之情

持るよかゝる涙や 楠の影 芭蕉

素白く 秘むる 影

ほろりし 影 ひとねの 影

悪ぬ 影

影のうらぬうらぬ 影 影

物押 影

青柳の わらうらむと 影

いのちの 影 影 影

幼くも やまぬ 影の 丸 影中

貞徳を像

自画讃

新四

竹日画

竹青く日赤く 影 素堂

花葉 影 影

影 影

葉を 影 其角

影 影

影の 影 影

影 影

影の 影 影

影の 影 影

影の 影

仲麿の画

國下の画

寒芝画

くらゝの急十布や免たか 其角

月ころやし古紙帆よすくこまき山

とあゆりくそびいそくそめおれ

りよまきしーくくおあいのけまおの巻

芭蕉の自画十二味周之潰

師の坊の十年志をし柿一信

浦崎うたよりの暮りる路の夢

水相叙の巻

系まきとてしと免ぬをのらり水の月

をみ井ふらるるれの巻

大板画

張良の画

維摩の潰

傘おろる月よ後ろくこまきこ

兵のひくこまきぬこりよの目か

好女小むらりこまきの巻

藤のそるやし路よちかてはる水

袖中の兵およ千くの月

布袋の月を擲る巻

ろくそなまこまきの月とや虎をて

山のそる大流するらり床の月

ちるほろろりあこまきの巻

扇よ潰さるこまきの巻

舞や一舞のつねを垣根うゑ 其角

いさかきいさかきいさかきいさかき

軍後かきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかきいさかき

流風やふしをまゆくゆはし

舟又船の葉をまゆくゆはし

かよふ舟のさうさ八かたこそ

こね舟とて流風よるさうさ

拾得の風やふしをかきまゆく

かきまゆくふしよるさうさ

いさかきいさかき  
いさかきいさかき  
いさかきいさかき  
四睡の圖

新平二

傾城の後

舟中かきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかき

月よるさうさいさかきいさかき

舟中かきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかき

乙子のさうさいさかきいさかき

舟中かきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかき

いさかきいさかきいさかき

傾城の後  
舟中かき  
いさかき



頼光山入の後

なまこくそに風おとほさし山橋 嵐雪

小町後

我意よ目も鼻もたれぬおのをも  
初中ふよりお静や橋をくも

八幡を吊りの僧

凡切てさしぬ劔のひうしつ那

七三子後

枯木もも着けりし木くれゆり鳥 表山

唯弘景僧

山中の相會中の木くんま 蕪村

猿丸美

我つてよとぬをさすひくち秋の雪

武者後

清ふ掃ふたのちれおのかり井

大の魚

おのちのみの雲より宛てお津の秋

舟

おのちのひとねをたまひけ武蔵坊

梅

うらひまやけつるるる新の梅

こととをふくまの凡くま女い飛

泥中よ東人のち

新の龜や青砥もまぬ心清り

黄一隆の画の僧

四又人よ月夜くくぬおのりま

老女の火をさすの店を車



本の下の蹄のうせや

蕪村

琴心桃美人

妹の垣根ささくその花咲ぬ

和古詩

春を焼ての鶯泣きを酒味

其角

逐歐陽公賦

愧りふれえよ辞たつて帰さる

酒債の昔往知有人生七十

古来稀

行はらへんや年減合ふ酒債ま

佛骨表

去らばつらむの煙をふりて韓退之

雜四六

春色人間總未知

国より大工をりてあり室のむせ

春色

焼ゆらぎを焼ての恨の祈り

妻驩詣

荆のさか裾をりてや旅をり

嵐雪

和心水推敲之句

そくく所よりそ月をりて梅れ門

其角

夜學感

夢の池をぬきて燈をりて

射者中変者勝

懐きよいつもよりの思ふは

詩經  
標有梅

る梅もしるる顔よりひと

希因

茅舎買永  
讀莊子

氷若く偃氣咽を洩せり  
彼をを嵐をさの海を海のうて

芭蕉  
其角

寂蓮

いりて我七石の砂を葉よる人  
おがりの骨枯るる山の夕ぐれ  
長唄の元よ海よれ寂きうて  
ふせとてりてまはし下略  
おのりるくまをを下に葉枯れ  
紙あの人のおを枯れををい先廣

雜  
四十七

のうををぬい合たり

雑つなせんすををを種を楯

井流のやとぬふたのををうて

こまうてまをあたる成

おせ者のつりもををいはるる

山をを葉のむよあし

一を所もこほさぬと葉の氷う那

芭蕉

遍思海ゆつるれの新本たれ

あををよまををををいねん

かしの本けををををををいねん

故事

おのの海くさゆき

衣文あまのりぬる路はらの宿 来山

人間一生不醉不醒

あまの海平一年中の水たひ

あまの海平一年中の水たひ

一歩もさかたぬまのり子孫のや 芭蕉

屏風より見るまのりは

迷ひまのりとはやうさちとまのり 其角

祈禱

帯力小舟部入道川をよみ海の

小袋ふんと風流のいさかき 下町

山吹舟井子流るる鏡 扇 蕪村

中納言藤原卿於馬場辰鏡馬

よめを直陳をよみしれ 其

言末如鏡

乳をよみしれ海の御成さそのけみ 嵐雪

無常

父のまうらうに...  
秋さうふらう...  
芭蕉翁病床

其角

多角墓

善ふふらう...  
まうらう...

其角

雜平九

追善

悼

沙弥宗  
解世

冬酉八月廿九日の昼亡又葬この  
場として翁の終を懐て四母の記別  
成しぬ  
一 淑又悼を本まも悦うに  
化野中悦を信うに骨をさる  
一 まふらう...  
嵐雪

嵐雪

芭蕉翁  
追善

まうらう...  
か...  
松尾心

其角

芭蕉翁  
百廿三

雪のむくもやむくれけりや 其角

とを成るる善化の作言

修海の志と十月の西

かゝ年成らばし下

善化さくぬ白ひ結りてふれり 嵐雪

急逝云 業のたや坊の度ゆく果ハミ

急逝云 業のたや坊の度ゆく果ハミ

急逝云 業のたや坊の度ゆく果ハミ

十月廿五日共挑隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱 上略

雜五十

は下よかく秘もらん言や

十月廿二日

十月をさかからそつりは

四十七歌集三物

木わじしの様も訓海の善と

十一月十日和月忌

陰中又字と兼ひしり 耐

左様と云十月十日一周忌

善人の祐を勉えん 納豆

朝更一周忌



あゝの暮涼よらるる木魚抄 嵐雪

西翁十七回宿意石

秋の故の吸けく石や一むじ 言水

そと角の母を悼

まらるるや河のほとけの涙つらん 芭蕉

口口九悼

あふらふりぢもれを塚の葉州

少年は笑ふ人のゆゑ

埋たもこも中洞の暮るる音

塚もろろけあはれを秋の風

晋子追善

檜も賣あまらうのこれの飯とえる

嵐雪

雜五十二

悼が長  
ト後追悼

秋の偈も連ふるとまゝめ可き

晋子追善

啼いりてさきもなげとこれる時

燈さしや菫菜の中よりとて橋 素堂

を我の信たのまののあま那 言水

鳥丸亜相の物柄の風とらるるを

そと角の母を悼

久孫四のとらるるを

かくもほひをさしむるを

秋もなほりて

世にふくむ 持場の風をさげし 治徳

夢にさうれて後さうもさうれ

さうらん

稲妻あやみゆいふもあやうと 其角

時子あやうき悼

折新よかほらやあはれ秋のせ

比人よ二百十日さうらさうら

危ねもさうさうさうさうさう

宝永三戌十一月廿二日好身童女

さうらう

悼朝叟  
吉田氏

酒巻を  
とむ

雲のちるまぬらんも殺られ

泣く涙を人さくもあはれ

昔をさう風巻を悼さう

嵐茶一子孤愁をさう

羊のこも芭蕉の秋を力さう

後世の義士をさう

あやうき時をさう

悼後立志初さう

昔のれ初さう

井月八日再さう

身もくして夜もく入らまひ月影 其角

いこの杜園例まゝてうせたる

よと誠人下りしやせんさるる

着もむつや〜とて巻ひたひ

又ほまてられ〜さなつてひ

はそれさるむ〜はあひひて

羽ぬきもつゝさる〜さつてひ

七十余の老醫者あつてしゆさ

よとさる〜さつてひ

め句成さるその元醫のいふ

そ〜さつてひ

人〜さつてひ

あ〜さつてひ

六人もかお〜や又月さ

柯求老人のま向

山系花や福を〜るおま

大町亭法

法の〜さつてひ

市川文牛追善〜九虎名は

〜さつてひ

塗敷の父をたてしめ申筋の事 其角

仙石の故守殿は月るるより

強ひぬ玉まらよは悔しと

不様申して手向の梅を

故赤穂城主浅野少府監長矩之

舊臣大石内藏助等四十六人同

志異体報亡君之讎今茲二月四

官裁下令一時伏刃齋屍

累世の仇はけり黄言成ひ

掃奸をけりぬく

妻悼

りくくしよよいあふ

尸の形指板かきし

を望むものちるや

悼昔流亡妻

おこふまあるまのあ

十一年のあつたき

弱やうのそとのそ

里右う娘

鬼打のさそれま

心ゆくして

義仲寺師父の廣

をとしもかたしうきつて風

水あつまきひそつた

なほしつるもみぢかきかき

清晋子 来山

三つ三つ くるもくさけのくさけ

年月つらきおのちのち

こころしつるもみぢかき

こころよ水ぬけのち

かみかみ 水ぬけのち

湖ふり父のあまきりし

あまきりし人をもくさけ

信子あまきりし人をもくさけ

あまきりし人をもくさけ

義美の夜新つてつる部 蕪村

春英子をきひて出し

とをたき佛よけし

後新つてつる部

らつてつる部のあまきりし

晋子三十四

悼あ悔

播磨の又ささきとてや寺の森 蕪村

夢のぬ道及まかせはの杖

秋の月相又ささきむすしと 来山

ささき舟とてささき

啼きとて人ささき悔の戸想ひぬ

左戻りるを悼生ささきの所

兼哉とて身のみ白くささき

雑題

無事とて題ある

廻文

無事

あさきとて幸ひささきのあさきひさき那 芭蕉

於人のあさきとて火あさき那 其角

悔のあさきとて白くささきのあさき

十三弦国年とて表しとて

岩のあさきとてあさきとて年より 来山

土佐の画の彩色とてしほのあさき 素堂

玉川のあさきとてあさきとて

あさきのあさきとてあさきとて 福 其角

輝のあさきとて尾上のあさきとてあさきとて

鈴のあさきとて月をささきとて海の味

後を又掃るに意を以て臥せし 其角  
髪の色も本絨のひとお枯るなり

漫成五倫

君臣有義

あつらひもさきよきことなほなほ

父子有親

親けやしつらき娘もをたらし

夫婦有別

分ちつたえねと出ぬもさきなり

長幼有序

待 弟を娘のふももさきなり

明友有信

天と云は糖も成てをさきなり

後者異邦の佛僧禪師十年

の息をしてふももさきなり

牛もさきなり娘もさきなり

なほさきなり

尋牛

やまはねをさきなり

呼牛

よつともあそびなほさきなり

隱牛

こゑのあそびなほさきなり





田文 きたたんとりちや言ひふ田渥 其用

雜 本五

附録 温故集

まをを返りてりるる

推中納言

定家卿

あつたつたつたつた

大納言

為世卿

いづつたつたつたつた

西三條

實澄卿

あつたつたつたつた

近衛殿下

信尋公

あつたつたつたつた

鳥丸大納言

光廣卿

あつたつたつたつた

鳥丸大納言

西武

あつたつたつたつた

鳥丸大納言

光廣卿

うきうきおきてわらわら〜のき

鳥丸大納言

光廣卿

小田原や〜ひのや〜の蒨あふせ

大関

秀吉公

乳きき傑う角力竹を〜ひ〜う〜

八幡太郎源義家

頼朝りき〜の〜し〜川

右大将源頼朝卿

〜と〜お〜ひ〜の〜

畠山重忠

柴田〜川〜

大関

秀吉公

き〜り〜免老の被さ〜の〜

細川

玄旨法印

〜と〜お〜ひ〜の〜

小堀氏

宗甫

〜と〜お〜ひ〜の〜

長崎丸屋衛門師宗

〜と〜お〜ひ〜の〜

深水三河寺入道宗甫

雜 六十六

後世〜と〜お〜ひ〜の〜

細川

玄旨法印

〜と〜お〜ひ〜の〜

羅山子林

道春

改卒の〜と〜お〜ひ〜の〜

半井

上養法眼

〜と〜お〜ひ〜の〜

西岸寺

估口上人

〜と〜お〜ひ〜の〜

鴨

長明法師

〜と〜お〜ひ〜の〜

紫野

一休和尚

〜と〜お〜ひ〜の〜

東海寺

元政上人

〜と〜お〜ひ〜の〜

紫野

一休和尚

紫の雲のうら上中南禅寺

松茸堂

昭乘

はさの雲のうらをて能るもくをを雲

高野山

梵仙上人

てんくの耳珠のももるるるの月

紫野

一休和尚

大さくの雲のうらをて能るもくをを雲

西岸寺

任口上人

るるるの雲のうらをて能るもくをを雲

正三位長官

常和

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

宗祇法師

九つの雲川志るるるの雲のうら

牡丹花

心敬僧都

携の雲のうらをて能るもくをを雲

宗長法師

雑六七

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

櫻井

基佐

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

宗養法師

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

救齋法師

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

周阿法師

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

里村

法橋紹巴

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

狩野

常信

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

瀬戸藤四郎

春慶

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

曾呂利

千利休

あさの雲のうらをて能るもくをを雲

堀川新右衛門

親當

えりや 并代のこも 母のこも

荒木

守武

え日のつらるるのよせし不二の山

山崎

宗鑑

鳳凰も出よのこもきさの酉の年

松永

貞徳

極る田の秋よなひくや秋は

宗祇法師

あくる梢おき下葉の何れか

貞徳宗祇法師の時

まよはするふ流しり 傍か

九條壁下号致山公

兼孝公

まよはするふ流しり 傍か

貞徳

○ 中古引

吹ぬ日や梅もよらるる 業れ

淡

身をたはよせして後さー 巻日記

敬雨

まよはするふ流しり 傍か

兜貫

た人ほりのまろくろから中貴院

素丸

あまよ一 印らまらん 録くとも

存義

梅おもさるなりれもろくく 月夜

湖十

あまよ一 印らまらん 録くとも

盤谷

あまよ一 印らまらん 録くとも

平砂

山加中し麻のふりむく番 椒 樓川  
 投らむし角カや砂よねの孰 肯原  
 風いぬ人の目ひやけしるも 紀逸  
 ふらふらとさよはひきしいうのちり 千代  
 雲中 山低うしとちあし 涼帝  
 空月よさらうらなふて人易し 竹阿  
 不ろくともさふほたのほまゆ 瓢水  
 藪入のこほまをくしよの宿 大祇  
 昔いづととや 湖よあしと出付音 麦水  
 源中流中 烟人もあつらん困なる 風律

雜六十九

る風のいらしきひより初さく  
 名月や月よりかよ隈もほし 蓼太  
 落ちる末よあさ者の悦大なる 白雄  
 ろろろく嵐のさる四つしとら 蝶爰  
 雪のつきや けう羽ささのうせう院 康工  
 とくちや 日さつりいへる東山 羅人  
 おもや ゆきさよもさして早月お 巴人  
 葉のさかや 暖味を跟うの東山 竿秋  
 肩さるうもさして居る橋さ 吞江  
 女むのたまより 起るらぬしとら 青蘿

樗良



追加

暗切く富士や石のそと日枝の山  
芥又もくくさぬさおとたうりて  
号や一日まことのこほれね  
ま〜梅やまよとむさいなおの林  
菘む〜とあふまの枝〜まらじ  
く中よか〜とた〜まぬ柿〜る  
梶の葉やと粒う〜とも秋のそ  
ふよくら〜折さん時ま〜る

嘯山  
二柳  
素外  
完来  
重厚  
旧國  
長翠  
五明

坪のこのとま〜も入より入の鳥  
き〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
戸のまを我よ〜〜〜  
いとよひち〜のら〜も月おが  
冬〜のあ本まき山〜り流ま〜り  
この井やま〜をぬおの乃〜る  
因〜る〜や本の葉捨〜む坊〜新  
長きおちや山〜の尾とまあれ〜  
そのま傍本〜りり〜や〜らの水  
上月や葉の舞ふお〜〜る

三千彦  
竹巢  
午心  
士朗  
夫左  
泰昌  
都雀  
瓦全  
石茶  
貞雅

けりし梅むきの嵐となりゆく  
 けりし梅むきの嵐となりゆく  
 ねのねはなまつ月あま  
 めよよれきね又けりきひくか  
 ね無や垂あて人を驚く  
 ねの市虫夢ひとう困なり  
 ねくくくくくのねはねはねが  
 ねねのねはなまつ月あま  
 ねくくくくくのねはねはねが  
 ねくくくくくのねはねはねが

喜齋  
 玉屑  
 成美  
 班旭  
 可都里  
 方廣  
 蒼虬  
 凡坊  
 月溪  
 関叟

雜七十二

けりし梅むきの嵐となりゆく  
 ねのねはなまつ月あま  
 めよよれきね又けりきひくか  
 ね無や垂あて人を驚く  
 ねの市虫夢ひとう困なり  
 ねくくくくくのねはねはねが  
 ねねのねはなまつ月あま  
 ねくくくくくのねはねはねが  
 ねくくくくくのねはねはねが

春蟻  
 道立  
 五来  
 樗堂  
 青橙  
 鹿古  
 尺艾  
 一州  
 鐵船  
 自樂

うらふらふ海ぬくらを小おの  
 おくくき湖よりうねまふ  
 湖を一日おとすものこり歩  
 日の影のふはらよたてりよのき  
 初雪のそくぬし雪のちかしくま  
 初日新く雪を二日よるのり  
 やふりやけぬくせきほきるま  
 石井の踏よりま入まやこる  
 けくきんらものそよ雪落ん  
 初雪ふまの秋のあ夕四く

魯隱  
 長齋  
 羅城  
 宰馬  
 東瓦  
 買明  
 木朶  
 空阿  
 石人  
 石井

蝶うせの身よりひびきて捨うらへ  
 きさゆる不き清てゆき秋けが  
 夕そら中人踏くそくやんを  
 中しふあまみよりよをの川  
 路くと解よき色居る雪まのり  
 葉のまつり花信川よんいふ  
 雪のそく取きふまそく雪の馬  
 雪娘そく雪まらとく日るま  
 捨よふそくひまの夜めふ那  
 けくきん水成終くまのま

右稻  
 若翁  
 月化  
 宰町  
 田禾  
 子坤  
 梅價  
 路人  
 布舟  
 寄淵

雜七十三



月アヤシ〜無〜泥人の目よりむ  
 姨控のくさき中よりほろろま  
 妻ひともしんをきり 野ふらり  
 けい〜の〜と〜れ〜ち〜柳よまゐる花史  
 蜂のふせふ〜凡〜ち〜く〜鳴〜こま〜し  
 後の月人未ぬ〜ふ〜表〜し〜  
 なま〜くの〜ち〜く〜く〜も〜句〜ひ〜り  
 ち〜ふ〜と〜ら〜の〜ま〜お〜ら〜の〜ほ〜ろ〜り  
 ち〜ふ〜ち〜や〜と〜く〜の〜茶〜と〜な〜ら〜る〜ら  
 ち〜ふ〜ち〜や〜有〜四〜月〜も〜藪〜の中

乙因 一茶 呂蛤 北豆 蜂友 雄測 騏道 素雪 雲仙 斗入

雜七十五

是るもの幻もた〜し〜ら〜ら〜ら  
 なろ〜し〜き〜目〜も〜九〜ち〜中〜ね〜の〜を  
 け〜妹〜の〜人〜は〜流〜る〜と〜ら〜の〜る  
 社母嘆〜大和山城終〜る

泊帆 平角 升六 駝岳

俳諧十家類題集雜之部終

寛政十一年己未五月

京都書林

大坂書林

野田 治兵衛

井筒屋庄兵衛

奈良屋長兵衛

河内屋喜兵衛

河内屋太助

塩屋忠兵衛

心齋橋筋博労町

同 北久太郎町

同 唐物町

同 北久太郎町

雜七十六終

廣弘堂

